Ⅲ　研究開発

1　地域を担う人材育成のためのプログラム

一昨年度、これまでに「総合的な探究の時間」を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、統合、再編、学校設定科目の新設等により効果的な活動へと組み直した。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させられるよう、研究を進めた。

地域を担う人材育成のためのプログラムでは、「地域資源活用プログラム」、特産品の開発や情報発信などの「課題研究」、外部人材との交流、先進校視察などを行う「県外フィールドワーク・講演会」、「地域理解」という４領域での探究活動を行った。

（１）地域資源活用プログラム

ブイアートプロジェクト

海岸の漂着ごみであるブイ（養殖業で使用する直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の球体の浮き）をごみではなく資源として捉え、アート作品として再利用するとともに、海洋ごみ問題について考えるきっかけにするというものが、ブイアートプロジェクトである。三崎高校の所在地である伊方町は豊かな自然のある町である。瀬戸内海と宇和海の二つの海を同時に見ることができるのは、日本中で伊方町だけであり、生徒たちは美しい海に強い愛着を持っている。しかし、平成 27 年度に地域の人たちと海岸清掃ボランティアを行った際に、多くのごみが漂着しているという実態を目の当たりにした生徒たちは、大きなショックを受けた。全国各地で捨てられたゴミが伊方町の海に漂着してきている、ふるさとの美しい海が、今、危機的状況に陥っている、このままでは、海洋汚染などの自然破壊や、魚介類が獲れなくなるなどの地域資源の衰退などにつながってしまうと考えた生徒たちは、その後も、伝統として海洋ごみ拾いのボランティアを続け、本年度までに５回のごみ拾いボランティアを実施した。生徒たちは海洋ゴミの中でもブイに着目し、ブイアートプロジェクトが始まった。同プロジェクトでは、主にアート作品を制作するとともに海洋ごみに対する啓発活動等を行う「ブイアート活動」と、ブイを使ったアクティビティイベントである「ブイリンピック活動」の二つの活動を行っている。

伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」で行われている「はなはな祭り」において、平成 30 年度より「ブイリンピック」を実施しており、子どもから年配の人まで多くの人に親しんでもらい、「はなはな祭り」恒例のイベントとして地元の人を中心に少しずつ定着してきている。しかし、昨年度と本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により緊急事態宣言が発令され、「はなはな祭り」自体が中止となってしまったため、ブイリンピックの開催も中止となった。その他にも１年間を通して、地域の各種イベントが中止となってしまったため、これまで地域でのイベントや本校学校行事の中で開催してきたブイリンピックを、本年度は一度も実施することができなかった。来年度も新型コロナウイルス感染症の影響により不透明な部分はあるが、感染症対策を徹底した運営方法を計画するなど、開催に向けた準備をしていきたい。

昨年度、八幡浜市で開催された愛媛県主催の「愛媛県プラスチック資源循環シンポジウム in 南予」において本校のブイアートプロジェクトの取組発表を行った。同シンポジウムは、行政職員や大学教授、漁協関係者、ボランティア団体代表など様々な立場の人が基調講演やパネルディスカッションを行うという、海洋プラスチック問題において非常に先進的なシンポジウムであり、本校は、その中で唯一の高校生による事例発表を行った。これまでのブイアートプロジェクトの紹介や、本年度新たに取り組んだオンラインでの取組に加え、10 分間のプレゼンテーションの間に実際にブイアートを制作することで、ブイアートと本校の海の豊かさを守る取組についてより分かりやすく周知することがで

きた。後日、同シンポジウムに参加していた大分県生活環境部の方に声をかけてもらい、本年度、大分市で行われた「おおいたうつくし感謝祭」にブース出展した。この事業は、一人一人が環境問題への意識を持ち、健全で恵み豊かな環境の実現を目指し、それぞれが考えを深めていくことを目的として開催されている。本年度は、特にフードロスや海ごみ問題を大きなテーマとして実施された。本校は、愛媛県のイメージアップキャラクターである「みきゃん」と大分県のマスコットキャラクターである「めじろん」のブイアート体験及び裂織りストラップづくり体験を行い、環境保全について考えるきっかけとしてもらった。

今回のブイアート体験では、密を避けるためと誰もが気軽に参加しやすくするために、実施方法を工夫した。１点目の工夫として、作業時間を短縮するために制作してもらうブイのデザインを「みきゃん」と「めじろん」に指定し、下地の着色を行った状態のブイを用意した。２点目の工夫として、待ち時間の短縮と低年齢の子どもでも楽しめるように完成したブイアートにシールを貼り付けていくデコレーション活動を実施した。その結果、子どもを中心に、家族連れなど多くの人にスムーズにブイアートを体験してもらうことができた。みきゃん用にオレンジ色に着色したブイと、めじろん用に緑色に着色したブイを５個ずつ用意していたが、10 時 30 分の開始から２時間ほどですべてのブイアートが完成するほどの盛況であった。その後、ブースに訪れた方には、シールデコレーション体験を楽しんでもらうことができた。ブイアートを作成する前に、ブイをはじめとした海洋ごみの問題や、ブイアートプロジェクトを始めたきっかけなどを説明することで、海洋ごみ問題や本校の取組について多くの人に聞いてもらうきっかけとなった。完成しためじろんブイアートのうちの１つは、記念に大分県庁内に展示していただいている。

本校では、地域との連携事業として地域の伝統工芸品である裂織りの研究と商品化に２年前から取り組んでいる。裂織りを身近に感じてもらうことと密を避けることも目的に、今回は手軽に作成することのできる裂織りストラップの作成体験を実施した。本校のこれまでの裂織り研究では、シュシュやハンドバッグなど主に商品開発に力を入れて取り組んできた。しかし、今回は普及活動ということでワークショップを行うこととなり、生徒たちはどのような物を作るか試行錯誤した。想定されるワークショップに参加者として、子どもや家族連れが多いのではないかと考えた。そこで、短時間で作成できる、かわいい、作ったものを使えるといった要素を取り入れたらよいのではないかということになり、ストラップを制作することになった。実際のワークショップでは、子どもや家族連れを中心に多くの人にストラップづくりに参加してもらった。中には、大分市で裂織りの保存に取り組んでいる家族が伊方町出身という人もおり、喜んでもらったり、懐かしんでもらったりした。また、参加した小学生から「楽しそうだから、大きくなったら三崎高校に行きたい」と声をかけてもらい、生徒たちは非常に喜んでいた。これまでの活動とは異なり、県外での活動であったり、ストラップ作りであったりと初めてのことが多く、企画や準備の段階から苦労することも多かったが、この取組を通して企画力やコミュニケーション力など多くの力を養うとともに、自己有用感を育むことができた。

これまでの活動で、伊方町やその周辺地域ではブイアートの認知度も少しずつ高まってきているが、初めての愛媛県外での活動ということで、当初は生徒たちにも不安な面も見られたが、ブイアートの説明をこれまで以上に丁寧に行う練習をするなど、生徒たちは自分たちで工夫しながら準備を行っていた。また、１年次から継続してブイアート活動を行ってきたことで、ブイアートを「自分ごと」として捉えることができており、ブイアートの説明や実践においても落ち着いて説得力を持った活動を行うことができた。今後もオンライン、オフライン問わずに多くのイベントに参加するなどして、海洋プラスチック

問題解決の一助となれるよう取り組んでいくことで地域貢献を行っていきたい。そのためにも、今後も、コンソーシアム構成員でもある一般社団法人Ｅ．Ｃ．オーシャンズ代表岩田功次氏などの外部の専門家と協働しながら、生徒たちの専門性を高められるような活動を継続的に行っていきたい。

昨年度より開設した学校設定科目「未咲輝学Ⅰ」において、１年生全員がブイアート制作を行った。一昨年度までも、「総合的な学習の時間」にブイアート制作を行ってきたが、グループ単位での制作であったり、イベントに使用するための下準備であったりして、学年全員がブイアートを制作したことはなかった。そこで、昨年度より地域資源活用プログラムの一環として「未咲輝学Ⅰ」の授業において１年生全体の活動としてブイアートの制作を行うこととした。これまで地域のブイアート制作の第一人者として活動している、ＮＰＯ法人佐田岬ツーリズム協会理事長の宇都宮圭氏を講師として招き、昨年度同様、愛媛県のイメージアップキャラクター「みきゃん」のブイアートを一人一つ制作した。制作したブイアートは校庭に飾り付け、文化祭などのイベントで来校者に見てもらうことができた。昨年度制作したブイアートは生徒用駐輪場に、本年度制作したブイアートは校庭に飾り付けることで、学校全体が華やかになっている。２年生同様に、１年生の約半数は学区外から入学した生徒であり、その内 11 名は県外生である。昨年度のブイアート制作をきっかけに、現在もブイアートの普及活動に積極的に活動に取り組み「おおいたうつくし感謝祭」に参加した２年生も県外生である。本校に入学し、ブイアートプロジェクトでの

活動をきっかけに海洋ごみ問題や環境問題に関心を持つ生徒が増加しており、本プログラムが一定の成果を上げているといえる。今年度は「おおいたうつくし感謝祭」や地域活動団体交流発表会「八のカン詰め」などのイベントに参加し、ブイアート活動を通して参加者に海洋プラスチック問題について考えるきっかけとしてもらうことができた。来年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着いていれば、地域の小学生や中学生にブイアートを中心としたＳＤＧｓについての特別授業を行うことで、高校生が中心となった持続可能な地域づくりに取り組んでいきたい。

一昨年度までの活動は、漂着ごみであり地域の課題となっているブイを地域資源ととらえてアートやアクティビティイベントを実施してきた。昨年度は、高校生自身の学びをオンラインも含めた多くのイベントで発信し、場所や年齢を問わずに多くの参加者に海洋ごみ問題に対する問題提起を行うことができた。本年度は、これまでの活動の経験を活かして積極的にイベントに参加し、県外まで活動の幅を広げることができた。来年度は、イベントの実施にとどまることなく、ブイアートプロジェクトをきっかけに、マイクロプラスチックなどの海洋ごみの問題や、海の豊かさを守る取組についても外部人材と協働して専門的な研究を行うとともに、そのことを外部に発信していくという取組も行っていきたい。今年度新型コロナウイルスの流行により実施できなかった地域の小・中学生に対して行う出前ブイアート授業や、実際に漂着ごみが流れ着いている海岸での協働活動を実施することで、海洋ごみ問題に興味・関心を持ってもらい、地域環境教育の一環とするとともに、郷土愛をより高められる活動にしていきたい。新型コロナウイルスの流行により対面での活動に苦労したことは否めないが、その一方でオンライン環境が急速に進展したことにより、生徒のオンライン技術の向上、社会でのオンラインイベントの需要の高まりなど、オンラインでの活動に取り組みやすい状況となっており、四国の最西端に位置している本校にとっては、地理的条件を超えて活動することのできる好機となっている。来年度は、昨年度実施したオンラインイベントにも積極的に取り組むことで多くの人にブイアート活動を発信していきたい。そのために、より効果的なオンラインイベントの在り方についても研究し、多くの人に研究成果を伝えるとともに、ＳＤＧｓ活動の推進を図っていきたい。生徒たちは、ブイアートプロジェクトでの活動を通して地域の現状を知り環境問題への関心を高めることはもちろん、多くの人と関わることで、実践力やコミュニケーション能力など様々な力を養うことができている。また、ブイアートを通して社会と関わり自分たちの活動を多くの人に聞いてもらい、認められることが生徒にとっては、それ以上に大きな財産となっている。ブイアートは地域の海岸清掃ボランティアをきっかけに始まった活動であり、活動開始当初はあくまでも環境教育としての意味合いが強かった。本事業におけるブイアート活動においてオンラインイベントや県外での活動を行い、これまで以上に多くの人と関わることができるようになった。そのことを通して、社会と関わり人と関わるということが、生徒にとってどれだけ大きな学びの場であり、成長の場であるかということを知ることができた。来年度以降も、学びの機会としてのブイアート活動の在り方について研究及び実践を重ね、より良い活動を行っていきたい。

（２）課題研究

課題研究としては、「情報発信」、「イベント」、「特産品開発」という三つの部門を設定した上で、より具体的な七つの研究班を編成した。生徒は、自らが興味のある研究班に所属し、探究活動を行った。昨年度までの探究活動は各研究班において一つの活動テーマを設定し、研究班全員で活動に取り組んでいた。本年度は２年生の人数が多いこともあり、各研究班の所属人数が増え、同じ研究班の中でも取り組みたい内容について多くの意見があることが年度当初のアンケートから読み取れた。そこで、本年度は多様な興味・関心を持つ生徒に対して個別最適化された学びを提供していくために、各研究班において生徒から出た意見を基に話し合いを行い、班の中でさらに複数のテーマに分かれた活動を行っていくことにしたことが、本年度の探究活動の大きな変更点である。このような取組の仕組みついては、全教員が探究活動に参加するというシステムを構築してきたことで可能になったと考えている。

ア　情報発信

情報発信部門は、「アート」、「防災」の二つの班に分かれて活動した。

三崎港周辺の地区は、どの場所からも海が見える非常に景色の美しい場所であったが、東日本大震災以降、津波への対策として、高さ 2.5 メートル、長さ 190 メートルほどの防潮堤が設置され、海を見ることができなくなってしまった。地域住民からも「味気なく、寂しい感じがする」という声が上がっていた。そこで、昨年度アート活動で地域を盛り上げるために防潮堤に絵を描くことを計画し、「ＭＡＰ（みさきアートプロジェクト）」を行い、みかんと灯台の二つの絵を完成させた。本年度は、新たに伊方町で多く水揚げされている「太刀魚」の絵を完成させた。新型コロナウイルス感染症の感染対策として高校生のみでの活動となったが、完成した絵は地域の人に喜んでもらっている。今回制作した絵は、太刀魚が防潮堤を突き破ってこちらに向かって飛び出してきているようなトリックアート的なデザインとなっており、新たな趣向を加えた作品となっている。これまでに制作した３枚の絵の前で観光客や帰省客などが写真を撮ることも多く、地域の新たな名所となりつつある。来年度も伊方町と連携して新たな絵の制作を進めるとともに、今後は完成した絵の保守点検についても計画し、いつまでも色あせることなく多くの人に愛されるものにしていくための取組にお力を入れていきたい。

今年度は「ＭＡＰ（みさきアートプロジェクト）」に加え、「Re:born プロジェクト」や地域のジオラマ作り、三崎高校のゆるキャラ制作などの新たな活動にも取り組んだ。

「Re:born プロジェクト」は手入れがされずに荒れ果ててしまった地域の公園を再生するためのプロジェクトである。本校の位置する三崎地域には、「ロケット公園」の愛称で親しまれている公園がある。公園の中心には、名前の由来となっているロケット型の遊具が設置されているが、老朽化が進みモニュメントのイラストも損傷が激しく、地域の子供たちの利用も減少している。そこで、アートの力で公園を再生し、地域の人の憩いの場とすることを目指して「Re:born プロジェクト」に取り組むことになった。公園を調査した結果、主な活動内容として、公園の清掃、モニュメントイラストの再生、遊具の点検及び修繕、トイレ等施設の改修が挙げられた。その中で、まず自分たちで取り組むことのできる活動として公園の清掃とモニュメントイラストの原案作成を行った。雑草や落ち葉の除去、トイレ及び側溝の清掃などに複数回取り組むことで公園の美化に努めながら遊具の点検も行い、修繕個所を拾い出した。また、それらの活動と並行してイラスト原案の作成にも取り組んだ。

次に、ピックアップした遊具の修繕個所及び、公園施設等については高校生の力で修繕が不可能なため、提案書を作成し伊方町に相談することとした。実際に、町の担当者に対

して生徒が「Re:bornプロジェクト」の趣旨及び要望等を伝える機会を作ってもらい、提案を行った。その結果、伊方町の事業としても予算化してもらえることとなった。「Re:bornプロジェクト」のプロジェクトリーダーとなっている生徒たちは、県外からの入学者である。この生徒たちは、地域住民として町に住み、地域で暮らす中で手つかずになっている公園の存在に気付き、何とかしたいと考えるようになり本プロジェクトを計画・実行した。当たり前すぎて地域住民が気付かない課題に気付き、地域のためにと活動することとができたのは、本生徒たちが地域外から入学してきたという「外の視点」と地域住民としての「内の視点」という二つの視点を持っているからであると考えている。在校生の半数以上が寮生であるという本校の生徒の実情及び、本校がこれまでに取り組んできた地域との協働活動が実を結びつつある結果であり、本事業終了後も継続して地域との協働活動を行っていくことで、主体的に地域と関わっていくことのできる人材の育成に努めたい。

本校は災害時の緊急避難場所となっており、地域の防災拠点としての役割を担っているため、「防災班」は、防災意識啓発ゲームの開発と地域連携避難訓練の実施に取り組んだ。

防災意識啓発ゲームとして、昨年度から継続して防災意識啓発ＲＰＧの制作に取り組んでいる。三崎地区の地形を題材に、災害発生時に適切な行動を取り、命を守るための知識を身に付けることができるようになるゲームの作成を目指して開発中である。本校では、プログラミングの授業等を開講していないため、生徒たちは試行錯誤しながら活動に取り組んでいる。そのため、作業に時間がかかっているが少しずつ進捗しており、来年度以降も完成を目指して制作を続けていきたい。

防災意識啓発ＲＰＧは、小学生を対象としており、より多くの人を対象として本年度は防災意識啓発カードゲームの開発にも取り組んだ。カードゲームも伊方町を題材としており、起こりうる災害の種類やプレーヤーが担当するキャラクターの職業や条件なども、伊方町を想定したものとなっている。カードゲームは、発生する災害や割り当てられたキャラクターによって様々なパターンでの災害発生時における対処法などを学ぶことのできる内容となっている。現在、ゲームデザインはほぼ完成しており、実際の制作及びテストプレイを行って改良を加えて完成させる段階となっている。今後は、完成したゲームを使用したワークショップ等を開催し、万が一災害が発生したときに自分たちも含めて一人でも多くの人が正しい行動をとることができるよう、地域住民の防災知識及び意識の向上を図っていくことが活動の大きな目標である。

地域連携避難訓練では、昨年度に続き地域の保育所、小学校、中学校と連携して合同の避難訓練を行った。それぞれの施設から、地域の緊急避難場所に指定されている本校に避難してもらい、そのサポートや避難誘導を本校生が行った。また、避難所開設訓練も行

い、実際に「防災班」を中心として避難所開設に必要な簡易ベッドや簡易トイレの設置、パーソナルスペースの区分けなどの練習を行い、より現実に即した訓練を行った。本年度で２回目ということもあり、生徒たちもスムーズに活動し、保育所の子どもや小学生たちに対して落ち着いて接することができていた。

また、本校ではスクールバスを利用して通学している生徒も多いため、本年度は新たな取組として地域の消防署と協働したスクールバスの事故を想定した避難・救助訓練も行った。消防署員から事故発生時の正しい避難行動や負傷者への対応について学ぶことで、命を守る行動について学ぶことができた。一般的に防災避難訓練といえば地震や家事を想定したものが多いが、現実に即した訓練を行うことで、生徒は自分ごととして真剣に活動することができていた。これらの地域連携避難訓練を通して、生徒は自分たちが暮らしている地域でどのような災害が起こりうるのか、その時に自分たちはどのような行動をとるべきなのかということを、一人一人が考えながら考えることができ、より実践的な訓練を行うことができた。今後も、地域社会と関わりながら、自分の命も地域の人の命も守ることのできる防災活動を行っていきたい。

イ　イベント

イベント部門は、「ＰＲ」、「カフェ」の二つの班に分かれて活動した。

昨年度まで、「ＰＲ班」は「イベント班」の名で、本校独自のイベントの開催と地域イベントへの積極的な参加を目指して活動していた。しかし、昨年度より続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大による相次ぐイベントの中止を受け、本年度は本校の魅力を様々な方法で発信する「ＰＲ班」して活動することとなった。

「イベント班」の活動から継続して行った活動としては、「みさこうたいそう 115」の普及と、一昨年度から実施している文化祭での愛媛大学ダンス部との合同創作ダンスの実施が挙げられる。一昨年度までは、地域の大きな行事である「はなはな祭り」や地域の保育所、高齢者介護施設等において「みさこうたいそう 115」を実施させてもらっていたが、昨年度以は、新型コロナウイルス感染症の流行により、それらの行事が中止になり、「みさこうたいそう 115」の普及活動に苦労してきた。その中で、本年度対面でのイベントとして実施することができた、吹奏楽部のコンサートである「みさこうフェスティバル」や夏休みに行われた中学生一日体験入学、11 月に行われた本校文化祭の中での中で一部振り付けを変え、接触しない形で体操を実施した。来年度以降も各種地域行事や、小・中学校の行事等と連携して「みさこうたいそう 115」を通して「みんなで　さいこうのこの町を　生み出そう」「伊方町民の健康寿命を 115 歳まで伸ばしたい」という、「みさこうたいそう 115」作成メンバーの思いを受け継ぎ、健康普及活動等を行っていきたい。

愛媛大学ダンス部との合同ダンスにおいては、これまで同様「ＰＲ班」の生徒が中心となって一般の生徒にも参加を募って実施した。愛媛大学ダンス部との合同練習だけでは

なく、イベント班の生徒がリーダーシップを発揮して本校生だけでの練習も行い、ダンスを完成させた。文化祭当日には大勢の人に見てもらい、本年度も大好評を博した。３年連続の取組となり、本校文化祭の定番プログラムとして地域の人にも認知してもらっており、今後も継続して活動を行っていきたい。また、本年度の活動は、愛媛大学ダンス部のリーダーの卒業研究のテーマともなっており、これまでの協働活動を通して愛媛大学との連携が深まったことが感じられた。

本年度の新たな取組としては、生徒の活動の様子を紹介する動画の作成及び発信による三崎高校のＰＲ活動が挙げられる。本校では、学校ホームページとフェイスブックページを活用して情報発信を行っている。その際に使用する写真や動画は教職員が撮影及び編集を行っていたが、本年度は新たな取組として生徒が編集した動画も使用して情報発信を行った。また、その他にも中学生一日体験入学や文化祭などの学校行事においても生徒が編集した動画を使用したり、「YouTube 甲子園 2021 夏」と「YouTube 甲子園 2022 春」に応募したりするなど、動画による積極的なＰＲ活動を行った。

来年度もイベントへの積極的な参加に加え、オンラインを活用したイベントの主催や情報発信なども積極的に取り入れ、ＩＣＴ機器等を活用した新しい形での情報発信に取り組んでいきたい。

「カフェ班」は、本校卒業生でもある地元レストランのオーナーと協働して、高校生カフェである「みさこう Café」の運営に取り組んだ。昨年度同様、月に一回のオープンと新メニューの開発に向けて準備や研究を進めた。特に、本年度は以前から交流の深い立命館宇治高等学校との協働活動の中でアイデアが生まれた、抹茶を使った新商品の開発に力を入れて取り組んだ。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、月に一回の定期的な営業をすることができなかった。しかし、その中で生徒たちは、地域の海水から精製する塩の品質を高めるための研究を重ねたり、看板メニューの「生どら焼き」と「フレンチトースト」製造の技術や接客マナーを高めるための練習を行ったりして活動を続けた。また、新たな取組として商品のテイクアウトによる提供にも取り組んだ。町営寮である未咲輝寮の完成お披露目会の際には、お土産として来場者に生どら焼きを提供して喜んでもらうことができた。

12 月には、ＮＰＯ法人「二名津わが家亭」の協力を受け、その活動拠点である「二名津わが家亭」で出張みさこうカフェをオープンすることができた。少子高齢化が急速に進む伊方町においては、公共交通機関が整備されていないため他地域への移動が困難な高齢者も少なくない。これまでオープンしたみさこうカフェにおいても、「参加したいが、移動手段がない」「三崎地区だけではなく自分たちの地域でもオープンしてほしい」という意見を多くもらった。そのような意見を参考にし、今回の出張みさこうカフェを実施することになった。初めての試みである上、新体制となって初めてのオープンということも

あり、失敗したり苦労したりすることもあったが、地域の人の協力を得て、無事に開催することができた。また、来場してもらった地域の人にも喜んでいただくことができ、今後のカフェ展開の新たなきっかけとなった。

今後も感染防止に留意しながら毎月のオープンを行い、地域の人を始めとした来場者に喜んでもらい、参加者同士の交流の場となることができる「コミュニティカフェ」としての運営ができるよう、活動に取り組んでいきたい。

ウ　特産品開発

特産品開発部門は、「商品開発」、「ツアー」の二つの班に分かれて活動した。本年度の「商品開発班」は、「海鮮鍋」「保存食」「瓶詰め」「うどん」「アロマオイル」「裂織り」の六つの小グループに分かれて活動した。

海鮮鍋グループは、地元の特産品である魚介類の魅力を発信することを目的に開発に取り組んだ。試行錯誤を重ねながら、一人暮らし世代の人をターゲットにし、好きなタイミングで食べることができるように、冷凍保存できる商品の開発を目指して研究を行った。地域の食材の中から伊勢エビやハマチなど具材となるものを選び、具材に合う味付けを研究した。今後は専門業者などと連携して冷凍保存の技術の研究を行う予定である。

保存食グループは、「防災班」と連携して災害発生時等の備蓄となる保存食の開発に取り組んだ。本年度は燻製にターゲットを絞り開発を行った。自分たちで施策を行った後で、伊方町の地域おこし協力隊員で水産担当である竹内義博氏を外部講師として招き、専門的アドバイスをもらった。竹内氏は伊方町で水揚げされた魚を素材とした燻製の商品開発を行っている。竹内氏の指導を受けながら魚だけではなく、肉や卵、チーズなど様々な食材で燻製作りを行った。完成した燻製は真空パックで保存することで、さらに長期保存できるように工夫した。今後は、定期的に製造を行うことでローリングストックとして活用できるようにしていきたい。

瓶詰めグループは、地域で作られている果物や野菜の瓶詰め商品の開発に取り組んだ。特に、規格外や商品価値の低い野菜などを使った瓶詰めの開発に力を入れて取り組んだ。本校では、令和元年度より校庭のだいだいを使ったマーマレード作りに取り組んでいる。また、昨年度から校庭のヤマモモを使ったジャム作りも行ってきた。そこで、それらの経験を生かし、地域資源をさらに活用するための瓶詰め商品の開発を行うことになった。これまで商品として市場に出回ることのなかった野菜を原材料とした瓶詰めを作ることで、フードロス対策、保存食としての活用、農家支援、地域経済の域内循環など様々な利点が考えられる。今年度は商品をピクルスに絞り、レシピの研究を重ねた。条例等の改正により、高校生が瓶詰めを製造、販売を行うことが困難になったため、今後は今回開発したレシピを基に製造を請け負ってくれる団体、事業所等を探すことで、商品としての市場流通を実現できるようにしていきたい。

うどんグループは、昨年から、しらすを練り込んだうどんである「ちりめん」の開発を行っているメンバーが研究を行った。麺にしらすを練り込むことで、栄養価が上がるだけでなく、風味が付き塩分使用料を減らすことのできる健康的な麺が完成する。本年度は使用する塩の割合を変えた麺を製造するとともに、麺に合うスープの開発にも取り組んだ。その研究成果を「ＥＧＦビジネスアワード 2021－2022」に応募し、第３位となる三浦工業賞を獲得した。麺のレシピは完成しているので、来年度は地域イベントでの試験販売等を行い微調整して、実際の販売へとつなげていきたい。

アロマオイルグループは、校庭の「だいだい」からアルマオイル抽出するという研究を行った。様々な抽出方法を試した結果、リービッヒ冷却管を利用した水蒸気蒸留法による抽出方法が効果的であった。それでも、時間がかかる上に抽出量が限られており、安定的な抽出は困難であることが分かった。そこで、抽出したオイルを使いせっけんやバスボムなどの商品開発を行うことでオイルの付加価値を高めることにした。来年度は、商品化に向けて安定したオイルの抽出及びアロマオイルを使用した商品の品質向上に努め、実際の販売を目標に研究を続けていく予定である。

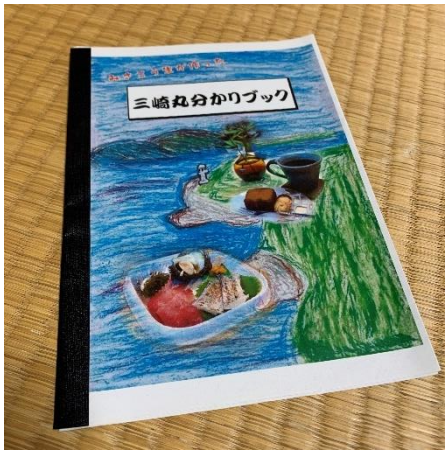
裂織りグループは、裂織りを使用した商品の開発に取り組んだ。裂織りの技術向上のために、地域の保存会の人を講師に裂織りの講習を行った。これまで裂織りのシュシュやヘアゴムなどを製造してイベント等で販売してきた。本年度はそれらの商品も参考にしてペンケースの制作と裂織りストラップ作りのワークショップの実施方法を開発した。特にストラップ作りは参加したイベントごとに好評で、裂織りに興味を持ってもらうためのきっかけ作りに最適である。今後も、各商品の質を上げて定期的な販売を目指すとともに、地域のイベント等で積極的にワークショップを行い、裂織りの普及活動にも力を入れて取り組んでいきたい。

今後も、身近なものを素材として活用することで地域の資源を生かしながら地域の魅力を発信するとともに、研究を行う生徒たち自身が地域の魅力を再発見できるような活動を行っていきたい。

「ツアー班」は、伊方町の魅力を多くの人に伝えるためのツアーイベントの企画・実行を目標に活動している。本年度は、魅力発信ガイドブック、動画の作成に取り組んだ。

昨年度、高校生目線のガイドブックを作成するため、取材先の選定や、取材交渉、原稿作成などの作成過程をすべて生徒自身が担当し、三崎地区の商店やグルメについてのまとめを行った。今年度は、編集、印刷及び製本を行い、冊子を完成させた。完成した冊子は、本年度の中学生一日体験入学に参加した中学生に対して配布し、掲載箇所を一部ツアーにするなどして活用した。現在はガイドブック第二弾として「歴史・文化編」を作成しており、今後も継続して様々なジャンルの冊子を発行していく予定である。

動画については、昨年度に引き続きサイクリング動画を作成した。昨年度は隣の八幡浜市の道の駅「みなっと」から、伊方町観光拠点施設「はなはな」までのサイクリング動画を作成したが、本年度は「はなはな」から四国最西端「佐田岬灯台」までの動画を作成した。また、サイクリングに使用した自転車も「はなはな」でレンタルできる e-バイクを使用することで、利用者目線の動画となるよう工夫した。完成した動画は、本校フェイスブックページで公開している。来年度は、これまでに作成してきたサイクリング動画を基に、実際にサイクリングイベントを開催することが目的の一つである。新たな取組として音声ガイドの作成に取り組んだ。この活動は、伊方町の魅力を外国人に対しても発信したいという思いから始まった。本年度は、伊方町最高峰である伽藍山の英語での音声ガイドの収録を行った。また、現在、伊方町と協働して佐田岬灯台砲台跡の音声ガイドを作成するための調査等を行っている。今後は伊方町や地元ＮＰＯ団体等と協働して、町内各所の音声ガイドを作成していきたい。



エ　せんたん部

せんたん部とは、地域活性化に取り組む有志のグループであり、これまでに地域活性化シンポジウム「せんたんミーティング」の開催や、地域ＰＲ映画「せんたんビギンズ」の作成などを行ってきた。せんたん部という名前には、「四国最西端の高校から最先端の取組を行う」という思いが込められている。本年度は、マーマレード作り、「#allwecando」プロジェクト、オンラインフェスティバルへの参加、各種イベントに参加してのプレゼンテーションなどを行った。

三崎高校の中庭には、かつて三崎地区の重要な特産品であった「だいだい」の木が４本植えられている。現在、伊方町の柑橘の主力品種は、清見タンゴールや、デコポン、紅まどんななどであり、だいだいを生産している農家はほとんどない。本校のだいだいも、地元農家の人に寄贈してもらった貴重なものである。しかし、だいだいは酸味の強い柑橘であるため、これまではその実は食べられることも、活用されることもほとんどなく廃棄してきた。これまでも、このだいだいの実を活用できないかという意見も出たが、決定的な案がなく、活用できずにいた。

一昨年度、隣の市である八幡浜市でマーマレードの世界大会、「ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバル」が開催されることを知り、これをきっかけに地域の新しい特産品を生みだしたいと考えたせんたん部の生徒たちを中心に、マーマレード作りに挑戦した。試行錯誤を繰り返しながら、三崎産のはちみつを加えることで、酸味と甘みのバランスの取れたマーマレードを作成することができた。保護者に分けてもらった清見タンゴールをブレンドしたものを加え、計４種類のマーマレードを作り、銀賞一つ、銅賞二つという結果だった。昨年度は、アワードでの金賞を目指して、過去のアワードで金賞を受賞した講師による講習会に参加したり、清見タンゴールに加え、「甘平」や「せとか」など、地域で栽培されている様々な柑橘類との組み合わせを試したりするなどして研究を重ねた、校庭のだいだいをベースに新たに７種類のマーマレードを作り、ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバルに出品したが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、残念ながら中止となってしまった。出品したマーマレードは、出品感謝状とともに返送されてきた。金賞を目指していた生徒たちにとっては残念な結果となってしまったが、昨年度から、ＪＡの営農指導員や地元農家の人と協働して、これまで手付かずだった、だいだいの木の手入れを行うなど地道な活動を続けており、金賞獲得に向けて研究を続けた。本年度は４種類のマーマレードを完成させ出品した。結果として、高校生部門において金賞及びベストカテゴリー賞一つ、銅賞二つという成果を収めた。金賞獲得を目指して３年間研究を重ねてきたが、ついに目標を達成するとともに部門最優秀であるベストカテゴリー賞を受賞することができ、大きな励みとなった。現在は、地域の二つの企業と協働して、金賞を受賞したマーマレードの商品化に向けて活動している。商品名やパッケージデザインなども金賞受賞生徒たちが考案し、工程や味の最終確認など完成目前まで進んでいる。販売後は町の新たな特産品とできるよう、「ＰＲ班」と協力して情報発信を行っていきたい。

また、来年度も八幡浜市でダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバルが開催されることが決定しているので、新たなレシピでの金賞受賞を目指して、来年度用に４種類のマーマレードを作成した。今後もマーマレードの作成を通して地域の新しい産業作り、地域の活性化につなげていきたい。

２月には、愛媛大学と協働して、令和３年８月に落雷による火事で焼失した伊方町内唯一の温泉施設である「亀ヶ池温泉」の再建に向けたオンラインイベント「よみがえれ亀ヶ池温泉プロジェクト」を開催し、せんたん部の生徒を中心に参加した。愛媛大学生を中心に伊方町出身の大学生と本校生が亀ヶ池温泉の再建に当たり、どのような施設であってほしいかということをテーマにワークショップを行った。本校の参加生徒は伊方町出身の生徒はもちろん、県外出身の生徒も参加しており、様々な視点からのアイデアが活発に出された。このワークショップで出た案を愛媛大学でまとめ、伊方町亀ヶ池温泉再建検討委員会で提案書という形で提出された。町の政策に高校生が関わる機会はほとんどないため、生徒にとっては貴重な経験となった。また、今回参加した生徒たちは、今後亀ヶ池温泉の再建が進むにつれ自分たちの提案が形になっていく様子を見ることで、自分たちの行動がまちづくりにつながるという手ごたえや喜びを感じることができ、社会と関わることの大切さを実感することができると期待している。今回のプロジェクトでリーダーを務めた愛媛大学２回生は、本校の卒業生でありせんたん部のメンバーでもあった。また、高校生の時に愛媛大学主催の「踊る！亀ヶ池温泉」に参加し「みさこうたいそう 115」を作成した生徒でもある。高校時代の活動が大学生となって生かされていることを知り、本事業及び本校の地域協働活動の成果を感じることができる機会となった。今後も本校卒業生との協働活動を積極的に行っていくことで伊方町との関わりを増やし、将来ブーメラン人材として帰ってくる生徒を一人でも多く増やすことができるよう、伊方町とも連携しながら様々な活動に取り組んでいきたい。

せんたん部は、様々な企画の立案や運営、事例発表を行うなど、本校の地域との協働活動におけるシンボルともいえる存在である。しかし、せんたん部として活動する生徒に

は、これまで大きな行事の企画・運営を行ったことがなかったり、人前での発表に苦手意識を持っていたりしている生徒も少なくない。せんたん部はその活動内容から、他の班の生徒よりも外部の人と関わることや、校内外を問わず話し合いをする機会が多い。そのため、企画力やコミュニケーション能力などの力が、日々の他者との協働活動を通して自然と伸長していると考えられる。今後は、せんたん部の事例をモデルケースにし、他の研究班における活動はもちろん、教科の授業や学校行事等においてもこのような「他者との協働活動による生徒の成長」を、より推進していくことができるよう、カリキュラム開発等の研究を進めていきたい。

以上のように、各研究班における研究活動が、本事業の探究的な学びの中心となる活動である。本校は、伊方町外から入学してきた生徒や、中学校時代につまずきを経験している生徒など、多様な生徒が在籍している。入学時には、伊方町への関心や愛着が低い生徒や、各班 15 人程度の少人数の班とはいえ、班活動や他者との協働を伴う探究活動を苦手としている生徒も少なくない。しかし、このような研究活動を通じて生徒は大きな成長を遂げ、伊方町への愛着を高め、探究活動に意欲的に取り組んだり、人前で堂々と発表したりすることができるようになっている。多様な背景を持つ生徒たちに対する個別最適化された学びの提供という観点からも、生徒一人一人がさらに意欲的に研究に取り組むことができるプログラムの開発に来年度も取り組んでいきたい。

（３）県外フィールドワーク

ア　宮崎県研修

（ア）研修地

宮崎県五ヶ瀬町

（イ）視察の目的

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の成果発表会の見学を通して、将来、地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成するとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

（ウ）視察の日程

・12 月９日（木）

19:00～20:00　五ヶ瀬中等教育学校　訪問
教養講座の見学及び参加
書道、ロボコン、ＧＩＳで探究する宮崎の防災、ボクササイズ、バレーボール、寺子屋シェルビー（英語の自習）の講座を見学、手話講座に参加。

・12 月 10 日（金）

９:30～11:00　五ヶ瀬町内見学（教職員１名、生徒３名）
10:20～12:15　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会【第１部】参加（教職員２名）
11:25～12:15　五ヶ瀬中等教育学校３年生との交流
12:15～13:20　昼食・寮見学
13:50～14:25　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会【第２部】生徒によるプレゼンテーション参加（全員）
14:35～15:40　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第２部】生徒による探究ワークショップ参加（全員）
16:15～17:10　意見交換（教職員３名）
16:15～17:10　校内見学・寮見学（生徒３名）

・12 月 11 日（土）
９:00～10:30　高千穂峡見学（地域の観光資源活用）

（エ）視察の内容と学んだこと

a　１日目視察の内容

①　五ヶ瀬中等教育学校の概要

五ヶ瀬中等教育学校は、宮崎県の「学びの森」フォレストピア構想の元、五ヶ瀬中学校と五ヶ瀬高校が平成６年に開校し、平成 11 年の条例改正を受けて、中等教育学校に校種変更し、誕生した。各学年 40 名、６学年（前期３年後期３年）の全寮制の学校である。

全国に先駆けて総合的な学習の授業に取り組んだ学校であり、その基礎は「学びの森」としてのローカル性にある。例えば、「総合的な探究（学習）の時間」においては前期課程の１・２年生では「共学共創」の精神の下、地域の方、特に五ヶ瀬村の人々との単純な経験、田畑の耕作、生き物を育てる等の体験を通して、生徒一人一人に彼ら自身が不思議に思うことを発見させ、それを基に探究を深めていく。３年生ではその疑問を深め自分と社会との関係性とつなげていく。４年生では「哲学対話」や「知の理論」等を生かして、発見した課題を抽象化したり一般化したりし、普遍的なものへと深めていく。５、６年生では課題の成果をまとめ、学校外の場で発表していくことを目指していく。

１、２年生の地域との交流においては、生徒自身が直接地域の方とのやり取りを行い、活動をしていく。その際、やり取りの方法はメールや slack などのチームコミュニケーションツール等によるもので、教員からは挨拶文の書き方などの礼儀作法のみ伝え、それ以外のことは生徒自身が直接地域の方と創り上げていく。教員と地域の方とのやり取りについては、初めに生徒との連絡の取り方に関して、地域の方にメールや slack の使い方などを地域の方に理解してもらうよう学校から働きかけていた。また地域の方の方針と学校の方針の行き違いなどが起こらないように、連絡内容やその考え方については充分風通しがよいものとなるよう配慮していた。

３、４年生の発見した課題を深める作業においては、メタ認知や批判的思考などのいわゆる「知の理論」や「哲学対話」を用いて、問いそのものを探究していく過程となっている。特にメタ認知や批判的思考については、全国の総合的な探究で結果を出し、その後目覚ましい活躍をする生徒を数多く輩出している学校では必ずと言っていいほど扱われているもので、その重要性を再確認できるものとなっていた。

５、６年生の探究した内容の発表については後述するが、県単位での発表やマイプロジェクトへの応募探究甲子園での英語による発表など、学校という狭い枠だけでなく外部に向けて発信することで３・４年生における問いの深め方の方向性や、自身の探究の社会的価値についてなどを確認するいわゆるメタ認知する場ともなっていた。

また、地域との交流を通して生徒が成長するというその過程の汎用性からＳＧＨにも指定され、今回視察した際には地域協働（グローカル型）事業の成果発表会を

ちょうど参観することができたため、そのことについては後述する。どちらも共通している五ヶ瀬中等教育学校ならではの発想は、自然が多く残るこの地域で「野性味」溢れる生徒を様々な場面で活躍させていくというものであった。

② 教養講座（放課後活動）の見学

多くの学校の放課後の活動として、生徒会活動や部活動などが挙げられるが、五ヶ瀬中等教育学校では夜 20 時から１時間程度、教養講座という希望者を対象とした活動を行っている。講師は必ずしも教員ではなく、地域の方や中には生徒が講師となっている活動もあった。寺子屋のように何かを伝えたい人が講師となりその内容を学びたい生徒が参加するまさに学ぶ場というものを提供している場であった。前述した通り今年度の内容は書道、ロボコン、ＧＩＳ（地理情報システム）で探究する宮崎の防災、ボクササイズ、バレーボール、寺子屋シェルビー（英語の自習）、手話講座が設けられていた。ロボコンについては前期生が県の大会で優勝したこともある。ＧＩＳについては後述する生徒全員が持つ Chrome book を活用しての活動となっていた。基本的にどの活動も教員もしくは地域の方などの大人が講師を務めていたが、手話講座のみ生徒が講師を行っていた。この生徒は史上最年少で手話検定１級を取得した前期課程１年生で、実際に本校の生徒も参加させていただいたが、自身は手話ができるだけでなく、表現力も優れていた。どの講座も希望者の参加ということもあり、やらされていると感じている生徒は皆無で、授業とは環境は異なるが一つの学びの場となっていた。

b ２日目視察の内容

① 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会【第１部】

本報告会は地域協働（グローカル型）事業の３か年活動報告会であった。本事業では共学共創の価値観の元、地域との協働を種として海外も含め社会に散在する様々な課題へと生徒の目を向けていけることを目的としていたものであった。五ヶ瀬中等教育学校にとって本事業の前身であったＳＧＨでは「野性味あふれるグローバルリーダー」が目指す生徒像であったことに対して、本事業では「野性味あふれる地球市民」としており、地域とのつながりを始点として、世界も含め様々な社会問題に対して自分事として捉えることができるような生徒の育成を目指していることがうかがえる。その内容は、授業としては前述した総合的な探究（世界農業遺産（ＧＩＡＨＳ）を基にしたもの）を軸としての発表であった。

着目すべき点であったのは、学校の教育活動を生徒の視点から見える化する組織診断を行ったこと（三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティングに外部委託）と五ヶ瀬中等教育学校独自の生徒評価である。

五ヶ瀬中等教育学校の生徒たちが様々な場面で活躍しているのも、カリキュラムや授業だけでなく、その独自の評価方法までも含めた学習活動によって成功していることが感じられる報告会であった。

② 昼食及び寮見学

昼食は、全寮制の学校であるため、生徒は昼になると一度寄宿舎に戻り昼食をとることとなっていた。栄養士が 20 人弱ほどおり、毎日全校生徒の口の中に入るものについても十分に気を遣っていることが分かった。寮は基本的に男女の行き交いはできない構造となっており、ちょうどその間に食堂があるという作りになってい

た。また、寮母が常駐しており生徒が生活に困った点がある際などは、いつでも相談にいけるようなシステムとなっていた。寮則で驚いたことは、スマートフォン等、外部との通信ができるような機器は持ち込みが禁止となっていたことである。学校の校舎内はWi-Fiが完備されており、生徒一人ひとりが所持しているChrome Bookでインターネットに接続可能であるが、寮ではWi-Fiも携帯電話等もなく過ごすこととなっていた。保護者が、もしくは生徒が連絡を取りたい場合は、宿舎においてある電話台（公衆電話のようなもの）を利用することとなっており、毎日夕方に保護者から連絡に対応することのできる時間となっていた。五ヶ瀬中等教育学校の教育内容を見てみると、ＳＧＨであったり、外部にオンライン等で発信したりとインターネットとは切っても切り離せない関係となっていることが分かるが、学校外の時間に果たして常にインターネットが必要かというとそういうわけでもなく、ましてやネット環境が必ずしも子どもたちの生活に不可欠ではないということが十分に理解できる生活を送っていた。

③　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第２部】前半　生徒によるプレゼンテーション

四つのブースに分かれて現６年生（後期課程）が総合的な探究のまとめでもある発表をそれぞれ行った。四つのどの発表も外部に何かしらの形で発信したものであり、以下ではそのうち二つについて報告する。

一つ目は地域医療について英語で発表したものである。発表した生徒の原体験として五ヶ瀬村の急激な人口減少と医療に対する危機感があった。前述したとおり、「総合的な学習の時間」の１、２年生の時に地域との活動の中で疑問に思うことを見つけ、３、４年生の時にその課題を社会との繋がりの中で捉え、５、６年生の時には外部に対して発表（この内容は、探究甲子園にて発表された）と、「総合的な探究の時間」を通して生徒自身が学校の目標に沿って学習し成長したことがうかがえた。また英語で発表したことで、国内だけでなく、海外においても同様の課題があることを示唆しながらその共有を図ろうとする意図が見受けられた。生徒同士の質疑応答で、おそらく英語がネイティブである生徒から英語で直接質問があり、互いにその内容を英語でやり取りする場面が見受けられた。

二つ目は若年層の投票率低下をどう解消していくかについて発表したものである。これは第５回高校生国際シンポジウムで、英語で発表されたものである。日本では特に低投票率が目立つが、この発表で着目すべき点であったのは、早い段階から投票する経験をさせることが必要ではないか、という結論であったが、その対象が幼稚園児などの小学校入学前の子どもたちに焦点を当てている点である。民主主義や投票という発想は、未就学児にとっては少し難しいと思われるが、五ヶ瀬中等教育学校の生徒は説明の方法を工夫することで、スムーズに未就学児による模擬投票活動を行うことができており、高校生ならではの視点による活動がすばらしかった。

④　「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第２部】後半　生徒による探究ワークショップ参加

後半は４年生全体に対する「総合的な探究の時間」のワークショップであった。新たな体験を生徒にさせるわけではなく、今までの「総合的な探究の時間」を生徒に振り返らせるものであった。それまでに経験した各行事等をどの枠に当てはまるかをグループで話しながら分けていくものであったが、特筆すべきはその枠であっ

た。区別するその枠は、「総合的な探究の時間」で生徒に身に付けてほしい力であり、見る力、問う力、試みる力、関連付ける力、つながる力の五つであった。これらは本事業の目指すべき生徒像としても列挙されている項目であり、教員はもちろんのこと、生徒自身もこの授業でどんな力を身に付けていくべきなのかを理解していることが充分にうかがえた。グループそれぞれでほぼ似た分類となっていたが、明らかに異なる場合などは教員が、なぜ生徒がそのように考えたのかを尋ね、行事とその評価を確認していた。おそらく多くの学校で何かを振り返らせる際には、生徒が文章化して何かの媒体で表現させることがほとんどだと思うが、このようにグループワークとしてお互いに表現しあいながら振り返らせることでメタ認知等の促進にもつながっているのだろうと予想できた。

⑤　意見交換

最後に地域協働（グローカル型）事業の担当者２名の教員と意見交換を行った。うち一人は前述した学校独自の生徒評価を導入した教員で、その導入の経緯もうかがうことができた。以前、五ヶ瀬中等教育学校にいらした先生が総合的な学習や学校を盛り上げていく上で、生徒を適切に評価していくにはどんな方法がよいかを考えた結果、学校独自の生徒評価が提案された。この評価方法は、従来の、ここまでできたから数値でいくつ、という評価ではなく、はじめに学校として目指すべき生徒像が示され、そこに到達するためにどんな段階が必要なのか、そのことをどのように評価していくべきなのか、という目的で行われるものであった。

また、もう一方の教員からはこの「総合的な探究の時間」を行っていく上で学校としてどのような環境が必要とされたか、をうかがうことができた。最も大事なことは風通しの良さで、学校内で教員がお互いどんな仕事をしているかはもちろんのこと、意見交換も活発であるとのことだった。また地域との強いつながりが必要とされる中で、様々な意見が挙がってくるが、腹を割って教員側も地域の方に納得してもらえるまで話をする必要があるとのことだった。前述したことは当たり前のことではあるが、五ヶ瀬中等教育学校の視察という短い時間でも、確かにその空気を感じることができた。さらに各教員のＩＴリテラシーのレベルが非常に高いものとなっていた。生徒は Chrome Book を使っていることに対して教員の標準装備は windows、また教員によっては mac を活用している方もおり、ＯＳが異なる機器であってもお互いにやり取りできる、指導できる、活用できるというのは珍しい環境であると感じられた。

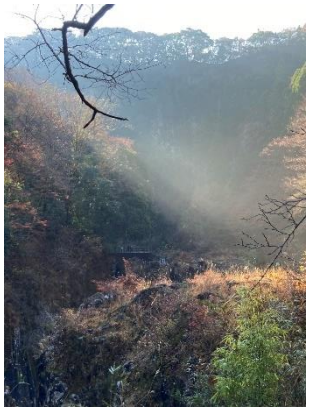
一方で生徒の学力レベルの高さによるところが大きいことも確認できた。各活動を参観する中で、そもそも言葉が分からないことや、論理が分からない、という場面に一度も出くわすことがなく、伝わらない際には分かるまで言葉を用いて説明することができていた。「総合的な探究の時間」や事業全体も、細部にわたり計画されており、生徒の基礎学力の高さもうかがえるものであった。

c　３日目視察の内容

①　高千穂峡見学（地域の観光資源活用）

三日目は地域の観光資源の見学として高千穂峡を見学した。日本の各種古典に出てくる高千穂であるが、その名に恥じない自然の雄大さを感じることができた。高千穂峡に行くまでも、多くの橋を通ったが、所々にある渓谷が非常に深い所にあり、初めに橋を作ったときの苦労を想像できた。三崎高校が海の近くにあることに対し

て五ヶ瀬も含め高千穂峡は大地に囲まれた地であり、まさに母なる大地と感じずにはいられない風景も多数あった。



イ　石川県研修

コンソーシアム参画団体でもある公営塾「未咲輝塾」講師神宮一樹氏による研修報告

（ア）研修地

石川県能都町

（イ）視察の目的

地域の文化や特産物、教育など地域資源を総合的に生かし、地域おこしに積極的に取り組んでいる能登高校への学校訪問を通して、地域の資源を複合的にとらえ最大限に生かす地域おこしの手法について学ぶとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

また、生徒会を中心に自発的に各種活動に取り組んでいる生徒の活動の様子を見て学ぶことで、自校での活動に生かす機会とする。

（ウ）視察の日程

令和３年 12 月 10 日（金）～12 日（日）

（エ）概要

今年度の初めより、三崎高校と石川県立能登高校の生徒間で、協働探究プロジェクト〈みさのと〉が行われてきた。これまでオンラインのミーティングや、互いの地域の特産物を送りあって商品開発を行ってきたが、ついに三崎高校の生徒が能登町を訪問し、対面での協働活動が実現した。この研修に参加した生徒５名、引率教諭１名に同行する形で視察を行った。

10 日夜は生徒、高校教諭とともに公営塾の視察を行った。「まちなか鳳雛塾」は旧公民館を利用しており、能登高校からはやや距離があるが十分なスペースがある。高校生だけなく小・中学生対象のクラスもあるため、五つの部屋を学年や用途（個別指導、英語リスニング等）に応じて使い分け、一室は休憩室に充てている。生徒たちは特に女性講師とよく会話をしており、音のしないカーペットやキャスター付きの椅子、塾生専用の物置スペースなどに惹かれている様子だった。

11 日、午前中は生徒、教員とともに能登高校へ行き、協働探究学習の様子を見学・記録した。これまでのオンラインミーティングの内容を基に、伊方のみかんを使ったマフィンを作った。比較的大人しい能登高校の生徒を、三崎高校の生徒がリードする姿が印象的だったが、お昼頃にはすっかり打ち解けている様子だった。

午後は神宮のみ別行動し、再び公営塾に赴き情報交換を行った。教科指導の方法（個別指導と授業形式の使い分け等）や塾生の集め方を中心に質問を受けた。一方、「まちなか鳳雛塾」の事例を受けて今後「未咲輝塾」に還元したい内容は次項にまとめる。

12 日は地域観光と移動のため、生徒引率を補助した。

（オ）今後の塾運営に向けて

a　スタッフ人員と施設の充実

「まちなか鳳雛塾」には現在４名の講師の他に、魅力化コーディネーターと事務スタッフがおり、講師は教科指導に専念しやすい体制が整っている。加えて、大学生のアルバイトスタッフが中学生の指導を担当している。また、前述したように教室数が多く、各教室に１講師の配置が可能になっている。

また、平日 22 時まで開塾し、土日も主に高３生への指導を目的として開塾しているが、これもスタッフ数を生かして勤務時間をうまく組み合わせているからこそ可能なことだと考えられる。

b　参加生徒の声

今回、他の公営塾の視察を生徒とともに行ったことで、前述したように様々な声を聞くことが出来た。より良い学習環境の整備には、当事者である生徒たちの意見を吸い上げる必要性を感じたので、今後は定期的なアンケートの実施等を検討していきたい。

c　交流の継続

まちなか鳳雛塾は理系講師が今年度で退任する一方、未咲輝塾にはいない文系・女性の講師がおり、双方の塾で部分的にでも役割を補完できる可能性がある。また、まちなか鳳雛塾の中心となってきた講師２名が今年度で退任するが、未咲輝塾でも来年度以降講師陣の入れ替わりが予想される。個人が入れ替わる中で、組織としてどのようにノウハウを維持していくかという点では、先行事例として参考にしたい。オンラインを念頭に、生徒たちが積み上げてきたつながりを、公営塾ベースでも継続して持ちたい。

まちなか鳳雛塾の教室

約 20 台の iPad

まちなか鳳雛塾スタッフと、三崎高校生

〈みさのと〉協働探究活動

まちなか鳳雛塾スタッフとの情報交換

研修参加生徒、引率教諭、神宮

（４）地域おこし講演会

９月には、濵田企画事務所代表であり、これまで本校の探究活動において協働してきた濵田竜也氏を講師として招き、１年生を対象に「探究活動の進め方」というテーマで地域おこし講演会を行った。当初は、対面での講演会を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンラインでの実施となった。本年度は、１年生の「総合的な探究の時間」の探究活動として、本校の７年間の歴史をまとめた冊子として「せんたん book」を制作することとなった。そこで、その準備段階として、本校のプロジェクト学習を含め、全国各地の高等学校や行政等と連携して地域活性化プロジェクトに取り組んでいる濵田氏から、プロジェクトの進め方について概要を説明してもらうとともに、「せんたん book」作成に向けた具体的な手法を学ぶための講演会を実施した。また、その後もオンラインでのリーダー研修などを通して、１年生の活動に伴走してもらっている。１年生にとっては、高校入学後、自分たちが中心となって進めていく大きなプロジェクトになっているが、濵田氏に伴走してもらうことでスムーズに活動することができている。また、本後援会で身に付けた手法を用い、個人探究活動において自走する生徒も増えており、探究活動の積極的な推進につながっている。

「せんたん book」は関係者へのインタビューや文字起こし、構成などを１年生が実施しており、本年度中の発行に向けて最終段階に入っている。完成した「せんたん book」は、校内での探究活動に使うほか、地域に施設や大学等に置いたり、地域のイベントなどで配布したりするなどして、新たな形の情報発信の方法として活用していきたい。

５月には、３年生の「未咲輝学Ⅲ」の授業において、11 月には２年生の「未咲輝学Ⅱ」の授業において、株式会社伊予銀行 高村尚吾氏を講師として起業と金融についての講演会を行った。

「未咲輝学Ⅲ」の授業において、ブーメラン人材育成のためのプログラムとして起業につ

いての学習を行っている。昨年度の「未咲輝学Ⅲ」の授業では、生徒一人一人がビジネスプランを作成し、優秀作品をビジネスコンテストに応募した。しかし、校内だけの指導では作成したプランを実社会でどのように実現していくのかを考えさせることにおいて不十分な面も見られた。そこで、専門的な見地を有する外部人材と協働することで、より実社会に根差したカリキュラムを編成したいと考え、株式会社伊予銀行三崎支店と協働した活動を行うことになり、その中で講演会を実施した。まず、金融についての基礎的な話をしてもらい、商業科目を履修していない生徒にも金融や商業の仕組みについての基礎知識を身に付けさせた。次に、資金についての考え方や貸借対照表の見方など、起業に関わる専門的な話をしてもらった。３年生は年度当初に行うことで、本年度の活動の参考として、２年生は年度末に行うことで、次年度の活動への準備段階として実施した。生徒からは、「これまであまりよく知らなかった経済の仕組みについて知ることができた」「専門的で難しい内容もあったけれど、興味深かった。今日聞けなかった話についても、ぜひまた聞く機会を作ってほしい」といった好意的な意見が多く聞かれた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大による活動の制限など予定通りに進まないこともあったが、「未咲輝学」の授業も開設から２年が建ち、カリキュラムとしての方向性が定まってきている。来年度は開設３年目となり、「未咲輝学Ⅰ～Ⅲ」の学習サイクルが一回りすることになる。これまでの取組の成果を検証する機会とし、今後のより良い実践の推進に向けて成果と課題の検証を行っていきたい。

10 月 21 日に専修大学商学部大崎恒次准教授及び大崎ゼミの大学生と本校でせんたん部に所属していた大学生のオンライン交流会を行った。

また、12 月 16 日には本校教職員と本校卒業の大学生が、大崎ゼミの研究発表会にオンラインで参加した。

大崎ゼミとは、昨年度よりオンラインによる事例発表会を行ったり、「総合的な探究の時間」の研究班との交流活動を行ったりするなどの交流を行ってきた。今回は、高校生と大学生ではなく、大学生同士の交流という新たな取組となった。高校生という「探究者」と教職員という「伴走者」との中間の存在である「関係者」としての大学生同士が交流できたことは、本校の探究活動において非常に大きな意味があったと考えている。本校をハブとして、本校の卒業生も含めて伊方町や本校の活動に興味や関心のある大学生同士を結び付け、大学生コンソーシアムを形成していくことは、本校にとっては関係人口とメンターの増加、参加大学生にとっては研究の実践の場の獲得という双方にとって価値のある活動になっていくと考える。また、オンラインを効果的に活用することで、その成果をさらに高めることができると考える。その大学生が大学卒業後も本校と関わり続けていけるシステムを構築することで、さらに大きな本校支援の体制を整えられるとともに、ブーメラン人材の育成にもつながっていくと確信している。今後も、これらの活動を積極的に推進していきたい。

本校の生徒は、地理的に他校生や外部人材との交流が難しい状況にある。そのため、このような機会に多くの人と交流することは、非常に貴重な機会であり、交流から刺激を受け新たな気付きを得る生徒は多い。このような外部の人との交流の中で、新しい知識を得たり、意見交換をしたりすることによる学びの効果は大きい。また、そうすることで、自分たちの

地域や自分たちの活動を客観的視点から見つめ直すことにもつながっており、自己評価・改善のプロセスとなっている。本年度はコロナ禍の影響により、多くの学校、関係機関でオンラインの取組が加速している。また、このような状況だからこそ、高校生のオンライン活用スキルや探究活動の進捗具合にも大きな差が生まれている。これまでは学校の立地状況により教育資源に格差が生まれていた面もあった。しかし、オンラインを効果的に使うことで都市から離れた地域にある学校においても、格差を減少させることができる。地域にある高校の新たな教育資源として、オンラインによる講演会や交流会などのシステム作りやネットワーク作りにも取り組んでいきたい。

（５）地域理解

１年生を対象に、「未咲輝学Ⅰ」の授業において、伊方町の文化財保護委員会委員長でもあるカリキュラム開発等専門家の黒川信義氏の協力を受け、地域理解活動を行った。

11 月には、黒川氏と運営指導委員会の委員でもある町見郷土館館長の高嶋賢二氏の案内で、三崎地区に遺る赤坂坊山石塔群の実地研修を行った。同石塔群は中世ごろに建造されたと言われており、その原材料の石は、九州や中国地方など様々な地域から産出されたものであり、当時三崎地区が海上交通の要所となっていたことを示す貴重な手掛かりとなっている。今回の調査では、黒川氏、高嶋氏の指導の下、磁石を用いて「よくつく石材」「僅かにつく石材」「全くつかない石材」に分類し、石塔の岩相と石材サンプル写真とを比較して、「凝灰岩」「安山岩類」「花崗岩類」のいずれに当たるかという調査を行った。実習結果データを分析した結果、８割以上が正解であったことなどから、生徒たちがある程度の理解力・観察力を高められたと感じられた。また、赤坂坊山周辺の地形（海岸段丘と石塔群の関係）や、松森城址、三崎水軍などの説明にも興味を持つ生徒も一定数見られ、地域の歴史や文化への関心の高まりも感じられた。

１月には、文化財研究のための拓本技術を身に付けるための実習を行った。まず、拓本の文化的意義やその実施方法などについての講義を受けた。また、実際に黒川氏が実施した拓本の実物を紹介してもらったり、自分が使う道具を作ったりすることで拓本への興味・関心を高めた。次に校内のマンホールを使っての実地研修を行った。本来であれば、実際に地域

に出ての拓本実習を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、校内での実施となった。生徒たちは、当然全員が拓本実習が初めてであり、風に吹かれて用紙があおられたり、絵の具を付けすぎて、紙が破れたりするなどの苦労もあったが、全員が拓本を制作することができた。昨年度に拓本実習を行った生徒たちの中には、本年度、伊方町の地域活動団体である「佐田岬みつけ隊」に参加している者もおり、黒川氏の指導の下、実際に地域の石碑の拓本を行い、保存活動を行った。来年度は、拓本を教材に国語科の授業において解釈を行ったり、地理・歴史科の授業において各年代における資料として活用できる教科等横断型の取組を行ったりしたいと考えている。

２月には、町見郷土館を訪問し、高嶋氏より展示物の説明や佐田岬半島の昔の生活についての解説をしてもらった。県外生はもちろん、地元の生徒にとっても見慣れない道具や聞きなれない話が多く、興味を持ったようであった。その後、黒川氏から佐田岬半島の岩石と地質についてパワーポイントによる講義を行ってもらった。実際に佐田岬半島で収集した岩石サンプルを用意してもらったことで、佐田岬半島の地質についての理解が深まった。この岩石サンプルに興味を持った生徒が多くいたため、現在は岩石サンプルを学校の図書室で展示してもらっている。

昨年度、本カリキュラムを受けて佐田岬半島の歴史や文化、昔の暮らしなどについて強い関心を持った生徒たちが「佐田岬みつけ隊」に参加し、町内散策や地形観察等の活動に取り組んでおり、本カリキュラムの成果が表れている。また、本年度の１年生にも「佐田岬みつけ隊」への参加希望者がおり、生徒の自発的な地域研究や地域団体との協働活動につながっている。今後も、生徒の地域理解を深め、自走性を高められるカリキュラムとすることができるよう検証を行っていきたい。

３月には、瀬戸地区にある愛媛県指定天然記念物の「須賀の森」の見学を行った。「須賀の森」は瀬戸地区三机湾入口から伸びた砂嘴の上にある。黒川氏から、「須賀の森」に入る前に砂嘴のでき方や、入口に置かれた石碑（注連柱：しめばしら）によってその奥が聖域であることを説明してもらった。須賀の森に入り、真珠湾攻撃で命を落とした「九軍神」や近年江戸時代から謎となっていた鬼面が発見されたことなどを説明してもらった後に三机湾などを見渡し見学を終了した。地元出身の生徒でも、須賀の森が県指定の天然記念物に指定されていることを知っている生徒はほとんどいなかったため、どの生徒にとっても新たな発見があったようであった。ただし、学校との距離が離れているため滞在時間を十分にとることができないという課題が見られた。これまで本校の地域活動の多くが、伊方町内の中でも学校所在地の三崎地区で行われてきた要因もそこにある。今後は課題の解決策として、授業時間の柔軟な編成や地域コーディネーターとの連携、地域拠点を構築した課外時間における活動の実施など、新たなシステムづくりに取り組んでいきたい。

長年勤務している教職員であっても、地域の歴史や地形に精通することはほとんどないため、これまでは地域の資源を活用しきれていない面もあった。しかし、黒川氏や高嶋氏のような専門的見地を有する地域人材と協働することで、地域資源を十分に活用できるということが分かった。今後も、分野に応じた地域人材の発掘及びデータ化を進め、三崎高校ならではの外部人材ネットワークを構築することで、さらなる地域資源の活用及び地域資源を生かしたカリキュラム改善に取り組んでいきたい。

他地域からの入学生が年々増加傾向にある本校にとって、１年生の段階でこのような地域理解活動を行うことは、その後の３年間の地域との協働活動における基礎となる。本年度は、昨年度から引き続き黒川氏や高嶋氏のような地域人材と協働した活動を行うことで、より専門的な見地からの地域理解活動を行うことができている。また、これらのカリキュラムがきっかけとなって地域団体や地域活動に参加する生徒が増加しており、「未咲輝学Ⅰ」が生徒と地域をつなぐハブとしての役割も果たしていることが分かった。その要因として、「未咲輝学Ⅰ」という学校設定科目を新たに設置し、体系的に学習活動を行ったことが大きいと考えられる。今年度の実施内容を基に、生徒が、より主体的に地域理解を進めることができるよう、親和性の高いカリキュラム開発に取り組みたい。

２　集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム

伊方町は、日本一細長い佐田岬半島に位置しており、東西 40 キロメートルほどの中に、およそ 40 の集落が点在している。そのため、現在でも集落ごとに独自の文化が残っている反面、多くの集落で若者の流出による過疎化が進んでおり、伝統行事や文化の継承が難しくなっているという課題も抱えている。それらの集落の活性化なくして、町全体の活性化にはつながらないと考

え、「集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム」に取り組むことにした。しかし、それぞれの集落の持つ魅力や抱える課題はそれぞれである。そのため、各集落に合わせたプログラムの作成が必要であると考え、一昨年度はその第１回目として２月 15 日、16 日に、旧瀬戸町大久地区で、地区を一つの舞台と見立て、「アート班」を中心に地区内をアート作品で彩り、第１幕から第４幕までの四つのプログラムで編成した各研究班の合同イベントとなる「せんたん劇場」を開催した。２日間、４幕のプログラムで地域の人を中心に、延べ 350 名程度の参加があった。生徒たちからは、振り返りの中で、「想像よりも多くの人が参加してくれてうれしかった」、「地域の人と一緒に活動できて楽しかった」、「準備に時間がかかってしまったので、次は計画の段階からもっと練りこみたい」、「他の地区でもこのようなイベントを行いたい」という意見が見られた。本事業の目的として「ブーメラン人材の育成」を、目標としてこれからの時代をたくましく生き抜く力と郷土愛の醸成ということを設定している。地域の集落の中に入り、地域の人たちと共に活動することは、生徒にとって負担となる部分もあるが、それ以上に得られるものが多く、本事業における目的・目標を達成するためには不可欠であると感じた。また、地域との協働という観点からも課題研究の成果を広く地域に発信し、評価してもらう良い機会になると考え、本年度は、伊方地区での開催に向けてプログラムを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止となった。来年度は、感染症の状況を踏まえながらオンラインの活用も含めて、実施に向けた計画を立てていきたい。

昨年度は、三崎地区に伝わる伝統文化である「裂織り」の継承と商品開発、「裂織り」を活用したビジネスプランの研究による集落等コミュニティの課題解決（文化の継承と産業振興による地域活性化）に取り組んだ。裂織りは佐田岬半島の伝統的な織物であり、各家庭で作られていたが、現在では保存会の人たちが制作しているだけになってしまっている。その保存会のメンバーも高齢の人ばかりであり、存続が危ぶまれる状況になってしまっている。そこで、本校でも６年前から不定期ではあるが、「総合的な学習の時間」や家庭科の授業において、裂織りの体験活動に取り組んできた。担当生徒を中心に探究活動を続け、一昨年度はモデルのローラと協働して「裂織りのシュシュ」を開発し、「せんたん劇場」などで販売した。それらの研究を基に、本生徒が中心となって本年度ビジネスプランを作成して「ＥＧＦキャンパスアワード 2020－2021」に応募し、第２位となる優秀賞を獲得した。また、「第１回八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」に応募し、入賞した。

本年度は、新たに裂織りのトートバック作りとペンケース作りに取り組んでいる。その際、裂き織り保存会の方に織り方などのアドバイスをしてもらうことで、裂織りの品質を高められるように努めている。また、本年度は新たな取組として地域イベント等において裂織りストラップ作りのワークショップを行うなど、新たな活動に取り組んでおり 11 月には大分県で開催された「おおいたうつくし感謝祭」に、３月には八幡浜市で開催された「八のカン詰」に参加し、多くの人に参加してもらうことができた。

本年度は、地域住民からの要望を受け、地域の伝統芸能の継承活動を行った。三崎地域では秋祭りの際に地区の子どもたちが「唐獅子」や「五つ鹿」といった演目を担当して実施している。

しかし、近年では少子高齢化の進行により子どもの数が激減しており、伝統芸能の継承が困難になっている。また、昨年度と今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、秋祭り自体が中止となってしまった。三崎地区の住民にとって、秋祭りは地域のアイデンティティとも言える重要な地域行事である。そこで、地域の伝統芸能の担い手として、本校生がそれらの演目を継承することになった。基本的な型の指導を三崎地区出身の３年生が行った。その後、地域の青年団の人に仕上げの指導をしてもらうことで完成度を高めた。本年度は、その疲労の場として本校文化祭で「唐獅子」「五つ鹿」「浦安の舞」の３演目を実演した。秋祭りが中止になり、寂しい思いをしていた地域の人にこちらの想像以上に喜んでもらい、感動や激励の言葉を多くいただいた。伝統芸能の継承活動に参加した生徒たちからは、県外を含めた町外出身者も多かったが、「お祭りの活動に参加してこれまで以上に地域の人とつながることができた」「私たちが踊っているのを見て、地域の人が喜んでくれたり、終わった後に声をかけたりしてくれたことがすごくうれしかった」という感想が聞かれた。来年度以降は、実際に秋祭りに参加する方向で話を進めている。高校生にとっては、実践的に地域理解を進めるとともに自分の出身地域の文化等についても関心を高めるよい機会となっている。また、地域にとっても文化を継承していくことができるというメリットがあり、相互に好循環が生まれつつある。地域の伝統芸能の伝承活動を行うことは、ブーメラン人材の育成においても大きな意味を持っていると考えている。

３　各教科・科目における取組

基本的には、全学年同時間に学年縦割りで開講されている「総合的な探究の時間」（１単位）を中心に、地域との協働による探究的な学習を実施している。また、昨年度より学校設定科目「未咲輝学」を各学年に設置した（１単位）。「未咲輝学」では、地域との協働活動の中にＳＤＧｓの内容を盛り込んだカリキュラムを軸として編成し、グローカルな視点を生徒たちに身に付けさせられるよう取り組んでいる。

新たな学校設定科目として「未咲輝学」を設置した背景として、一昨年度、探究活動が活発になるにつれ、「総合的な探究の時間」の１時間では時間が不足してしまうことになり、放課後や休日に活動を行わざるを得なくなってしまい、生徒・教員ともに負担が増加してしまっているという課題が顕著に見られるようになったことが挙げられる。今年度は、これらの時間を軸としな

がら、それぞれの教科の授業の中で地域との協働による探究的な学習活動を行うことにより、そのような負担を減少させるとともに、より大きな教育的効果を得ることを目指し、教科ごとに、それぞれの教科の授業の中にどのように地域との協働による探究的な学習活動を行っていくのか、ということを研究した。

外国語科（英語）の「英語表現Ⅰ」の授業において、「都市部に住む高校生は、地域留学を体験するべきだ」というテーマで英語によるディベートを行った。本校には県内はもちろん、県外からも多くの生徒が入学している。生徒一人一人がそれぞれの立場から自分の体験に基づいて意見を述べており、地域との関わり方について考えを深めることや、お互いの立場を尊重しながら協働して活動していくことの価値を実感することができていた。

国語科の「国語総合」の授業において、『奥の細道』を学習後、愛媛県南予地域を代表する俳人である、芝不器男についての学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を３時間かけて行った。愛媛県出身の生徒の多くは、小学校や中学校の時に俳句の授業を受けているが、県外出身の生徒にはほとんど俳句の授業を受けていない生徒もいた。また、表現活動に苦手意識を持っている生徒もいるため、俳句の創作に苦労する場面も見られたが、全員が一句創作し、ミニ句会を楽しむことができた。誰がどの俳句を作ったのかが発表されるたびに歓声が上がり、上位に選ばれた生徒もうれしそうであった。芝不器男について学習したことをきっかけに、作成した俳句は実際に「第 68 回不器男忌俳句大会」に投句した。その結果、入選として６名の生徒が表彰された。今後も俳句を通した地域の伝統文化、伝統文学の理解に努めるとともに、地域の俳人と連携した活動を取り入れるなど新たな取組も行っていきたい。

外国語科（英語）や国語科の授業における研究を通して、教科の内容を学ぶことにとどまらず、外部へと開かれた授業にしていくことは高校側、地域側の双方に利益があるということが分かった。また、各教科で学んだことから興味を広げ、自主的に探究活動に取り組む様子も見られた。生徒の学びの自走性を高めるという点においても、各教科における地域資源を活用した学習活動が効果的であると感じられた。これまでの取組において、高校生がハブになり、地域に住む人たちをつなげていくという新しい地域づくり、場の提供が行えるのではないかという仮説を立てたが、本年度様々な場面で地域の人と接するたびに、本校を中心とした地域の一体感というものが高まっていると感じた。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、調整等で苦労することもあったが、来年度以降も、高校を核とした新たな地域連携の在り方も念頭に置いた授業作成を行うとともに、各教科における地域との協働による授業の研究を行っていきたい。

来年度は、新型コロナウイルス等の影響により本年度実施できなかった内容も含め、理科の授業で電力関係の人を招いてエネルギーに関する授業を行ったり、国語科や地歴・公民科の授業において、地元郷土館の学芸員の方を招いて地元の歴史に関する授業を行ったり、商業科の授業において地元起業家の人に実際の商業活動についての授業を行ってもらったりすることなどを検討しており、各教科・科目における地域との協働による探究的な学びをさらに推進していく予定

である。また、新教育課程の実施に合わせてカリキュラムを見直し、地域協働活動を推進することのできる学校設定科目を設置するなど、特色ある教育課程の編成に取り組むとともに、地域連携活動を軸とした教科等横断的な授業の実施などに取り組み、生徒一人一人にとって魅力あるカリキュラムを編成していきたい。

４　視察研修

（１）視察地

北海道大空高等学校

（２）視察の目的

総合学科であることを生かした、個に応じたカリキュラムの推進やＩＣＴ教育の推進など、新しい学校づくりを行っている大空高校の見学を通して、将来、地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成するとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

（３）視察の日程

12 月 17 日（金）

10:00～12:00　大空高校視察及び大空町教育委員会職員との意見交換

13:00～15:00　大空高校学校概要説明

15:00～16:00　生徒との座談会

12 月 18 日（土）

10:00～12:00　大空高校学校長と意見交換及び現地視察

（４）視察の内容

ア　大空高校視察及び大空町教育委員会職員との意見交換

北海道北東部にある大空町は、旧女満別（めまんべつ）町と旧東藻琴（ひがしもこと）村が合併して生まれた、自然豊かな町である。大空町の人口は約 7200 人。この町で、令和３年度、大空高校が開校した経緯を大空町教育委員会参事村山修氏、主査阿部亜美氏から聞いた。「この町には、道立で普通科の女満別高校と、町立で農業を中心に学ぶ東藻琴高校がありました。ただ、両校への入学者数は年々減少して。うち１校は統廃合の対象になったんです。中には『電車やバスを使って通える学校もあるし、１校残せば良いだろう』と言う方もいました。」しかし、町としては、そう簡単に割り切れない気持ちがあったという。もともと大空町に高校はなかった。なぜならば、農業が主な産業の一つであるこの町では、昔は子どもたちも家の農作業を手伝うのが当たり前で、進学できない子が多かったからだ。果たしてそれでいいのか、なんとか子どもたちに教育の場を届けたい、未来につなぎたいという想いから、両校舎を活用しつつ発展的に統合し、町立高校としてスタートさせる方向で住民に理解を求めていった。「新しい高校は、地域の人や学校の先生、行政もいろんな人が関わってゼロからつくっていく場所。それぞれ立場は違っても、教育を通じて何をしたいかをお互い真剣に考えれば、同じ目線で語ることはできるんだなと実感しつつあります。」これは、阿部さんの言葉である。どんな高校をつくっていったらよいか、そこでどのような生徒を育てていきたいかを、住民代表や高校の先生たちを中心に、議論を進めた。高校魅力化プロジェクト検討委員会が立ち上がり、離島や中山間地域において、その土地にある資源や課題に向き合う学びを通じて、魅力ある学校づくりを目指した。具体的には、地域特性に合わせた「カリキュラム改革」、学力向上に加えて将来の進路も考えていく「公営塾」の運営、そして地域外からの生徒を受け入れる「教育寮」の設置の３本柱でプロジェクトを動かしていくことであった。大空町でも、ゼロベースから高校魅力化を図っていく方向で、住民からの合意が得られた。東藻琴高校で専門にしてきた

農業を踏襲すべきではないかという意見も出されたが、農業だけに特化することで入口も出口も狭くなってしまうのではないか、という問いが投げかけられた。農業を通じて人をつくるという考えは取り入れつつ、「総合学科」として発展させていくのがよいのではないかと、結論を導き出した。

イ　大空高校学校概要説明

大空高校は、民間出身の大辻雄介氏を初代校長に迎え、様々な取組を実施していた。大辻校長先生は、大手進学塾や予備校で数学を指導したのち、ベネッセコーポレーションに就職。ＩＣＴを活用した教育ビジネスの新規事業開発を担当し、遠隔授業サービスにおいて同時接続１万５千人の授業を実践した。その後、島根県隠岐島前高校、高知県嶺北高校で学校魅力化プロジェクトに携わり、総務省地域情報化アドバイザーにも就任した。スタディサプリ数学講師の経歴を持つなど、非常に多彩なキャリアの持ち主である。大空高校では、風に乗るグライダー人間ではなく、自らの力で飛ぶ「飛行機人」を育むことを目標に掲げ、タブレット端末も１人１台貸与しており、映像講義・ＡＩドリルを活用し学びの個別最適化を図っていた。特徴的な取組として、１年生「産業社会と人間」、２年生「探究（地域問題解決）」を通して興味関心を掘り下げ、進路・進学の方向性を自ら考えさせることが挙げられる。３年生になると、ファシリテーターとして後輩たちを指導する立場にまで成長することを目指していた。総合学科として、３年時には時間割の約８割を自分で作成し、主体的に学ぶ力を育むため、定期テストは実施していない。定期テストは実施しないが、単元テストを定期的に実施し、生徒の学習の定着を図っていた。生徒の座談会の中でも「単元テストがあることで、定期考査に比べ範囲も狭いので勉強しようという気持ちにもなるし、勉強時間も成績も上がりました。」という言葉が印象的であった。教員から一方的に与えられる受け身の姿勢ではなく、ＩＣＴを活用した授業を積極的に展開しており、授業ではあらゆる場面で生徒同士が教え合う場面が見られた。

令和５年度には町営の寄宿舎が完成する見通しで、今後ますます学校の魅力化を推進していくという。

ウ　生徒との座談会

大空町内、町外、道外の１年生６名と座談会の機会を与えていただき、ざっくばらんに話をさせていただいた。大空高校での生活に非常に満足しており、前向きに学校生活を送っていた。「どうして大空高校を選んだのか」という質問に対して、「大辻さんの存在」という回答が多いのが印象的であった。

エ　大空高校学校長と意見交換及び現地視察

大辻雄介校長先生に大空町を案内していただきながら、意見交換を行った。本校と同じく「地域みらい留学」制度を利用し、県外生が入学していた。寄宿舎生活での課題についての話し合いが中心であった。長期休業中の閉寮日の設け方や、体調不良者への対応、問題行動への対処方法などを話し合った。おおむね、本校の取組と大きな違いはなかった。大空高校でも試行錯誤の最中であり、全国募集を以前から実施している学校や寄宿舎が設立されている学校から情報や制度を取り入れながら、生徒たちにとってより良い寄宿舎運営を目指していきたいと意見が一致した。

オ　参加教職員所感

令和４年度から開始される新学習指導要領に伴い、非常に充実した視察となった。本校も

令和元年度から本格的に全国募集を開始し、「地域みらい留学」にも参画させていただき、県内外から多くの生徒が志願してくれるようになった。生徒募集は軌道に乗り始めたが、今後、本校がより魅力的な学校に成長していくために必要な内容が凝縮されていたように思う。観点別評価の在り方、ＩＣＴ機器を積極的に活用した授業等、今回の視察を今後の学校運営に生かしていきたい。大空高校では、地域とのつながりの強さを感じた。町全体が育てたい子ども像を共有し、「学校と地域」という別個のものではなく、「地域の中の学校」であり、そこには、学校と地域の境界線がないように思えた。地域も積極的に教育活動に携わり、学校の運営をサポートしているため、教員がより教育活動に集中できる体制が整っている。大空高校は、これからの三崎高校を考えていく上でとても良いモデルとなった。

５　成果発表会（未咲輝 - SENTAN - 発表会）

(1)　期日

令和４年２月８日（火）・９日（水）

(2)　実施内容

DAY1「SEN」

14：45～14：55　開会行事
15：05～16：10　各種発表
16：15～16：25　諸連絡

DAY2「TAN」

13：45～13：55　諸連絡
14：05～15：25　「総合的な探究の時間」成果発表
15：35～15：45　閉会行事

(3)　概要

六つの研究班が、１年間取り組んできた探究活動について、研究内容及び得られた成果等について発表する。司会・進行は「せんたん部」の生徒が担当する。

(4)　その他

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、対面での発表会ではなく本校フェイスブックページでのオンライン配信を行った。また、ウェブ上での感想記入用フォームを作成した。

(5)　詳細

①　防災班

「防災班」は、主に「防災意識啓発ゲーム」の開発と「地域連携避難訓練」の実施目標として活動を行った。防災意識啓発ゲームは、昨年度より開発を進めているＲＰＧに加え、新たにカードゲームの開発にも取り組んだ。また、２回目となる地域連携避難訓練では、初となる避難所設営訓練も行った。今後はゲームの完成とゲームを用いた防災意識啓発ワークショップの開催を目指して活動を行っていく。また、今年度初めて実施した地域連携避難訓練も引き続き実施していく予定である。

②　アート班

「アート班」は、三崎地区の防潮堤へのアート作品の制作を主な活動として取り組んだ。本年度は３枚目となる防潮堤アートが完成し、町の新たな観光資源として注目を集めるよ

うになっている。また、本年度は地域の公園を再生する活動や地域のジオラマづくりなど、地域と密着した新たな活動にも取り組んだ。今後も、アートの力で地域を明るく元気にできるような活動を行っていきたい。

③　商品開発班

「商品開発班」は、班の中でさらに六つのグループに分かれて各グループで積極的な活動を行った。その中で、しらすを練りこんだうどんの開発アイデアをビジネスコンテストに応募して入賞したり、裂織りのワークショップを県内外のイベントで開催したりするなど、積極的に郊外へと研究成果を発信してきた。今後は、これらの商品の完成度を高め、実際に販売することができるよう、研究を進めていく予定である。また、今後も継続して開発した商品を使って外部のイベントやコンテストなどにも積極的に参加していきたい。

④　ツアー班

「ツアー班」は、ガイドブックとサイクリング動画の制作を中心に活動に取り組んだ。本年度は、三崎地区の商店を紹介するガイドブックを作成した。完成したガイドブックは、本校の中学生一日体験入学に参加した中学生に配布するとともに、実際にガイドブックを活用したツアーを行った。また、観光拠点施設「はなはな」から伊方町の主な観光名所であり佐田岬灯台までのサイクリング動画の制作などを行い、地域の魅力を発信してきた。また、伊方町の名所を案内する音声ガイドの作成にも取り組んでいる。来年度はこれらの活動をひとまとめにした三崎高校オリジナルツアーを企画する予定である。

⑤　カフェ班

「カフェ班」は、地元レストランの「まりーな亭」と連携して、高校生カフェ「みさこうCafé」をオープンした。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、活動が制限される中、テイクアウト商品の開発や出張「みさこうCafé」など、新たな取組を行った。また、海水から精製する塩の品質を高められるように研究を進めている。来年度は、新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、一人一人の技術を向上させ、よりよいカフェを目指したい。

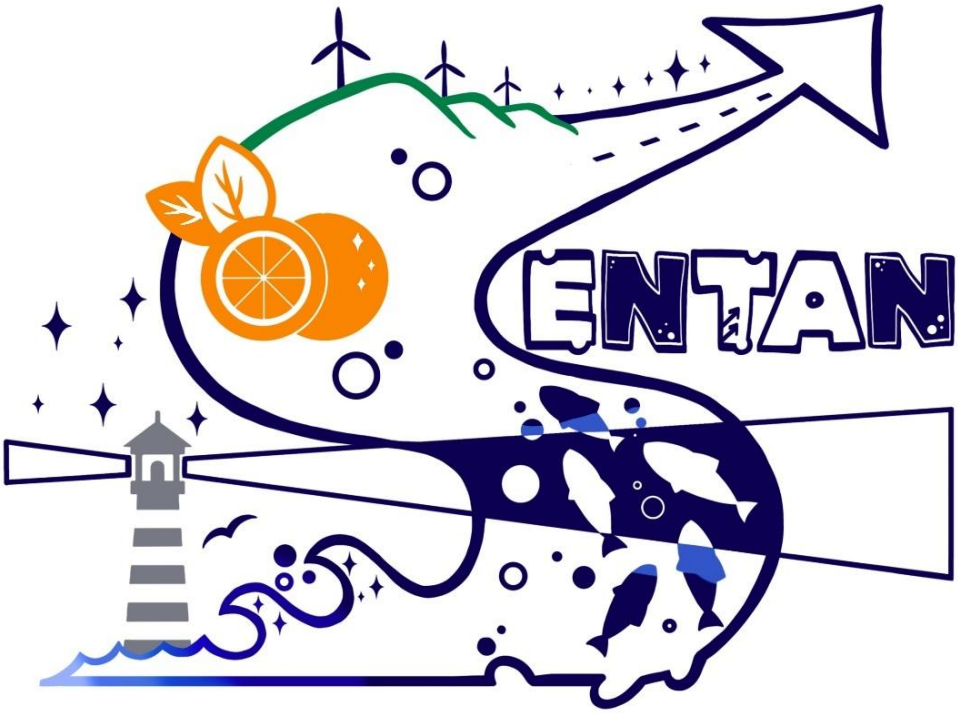
⑥　ＰＲ班

「ＰＲ班」は、新型コロナウイルスの感染拡大により、地域イベント等が相次いで中止となる状況が続いているため、新たに「ＰＲ班」として活動を行った。これまでに行ってきた「みさこうたいそう 115」の普及及び愛媛大学との合同ダンスプロジェクトに加え、学校紹介動画の制作及び発信を通して三崎高校のＰＲ活動を行ってきた。来年度は多くのイベントで「みさこうたいそう 115」を普及活動や愛媛大学ダンス部とのコラボダンスの取組も継続して行っていきたい。また、効果的な動画制作や発信の方法を学び、高校生目線の情報の発信にも力を入れていきたい。

（参考資料「未咲輝-SENTAN=発表会配布資料」

未咲輝-SENTAN-発表会

～online～



知らないことだらけ、知りたいことだらけ、の私たち。
「うみ」と「そら」と「かぜ」と。この場所でしか出会えない人に出会い、
この場所でしか見ることのできない景色を見てきた私たち。
時代の最先端で、環境に言い訳せず、私たちができることをやっていきます。

日　　時：　令和 4 年 2 月 8 日(火)、9 日(水)

会　　場：　**愛媛県立三崎高等学校**

オンライン：　**三崎高校 Facebook ページ（QR コード）**

主　　催：　**愛媛県立三崎高等学校**

三崎高校「せんたんプロジェクト」

ビジョン：

伊方町唯一の高校である三崎高校は、過疎化、少子高齢化が進む地域において、地域活力の一端を担う存在として、ますます地域的役割を求められるようになっている。
また、そうした状況を踏まえ、「総合的な探究の時間」等を通じて「地域」との連携を深めている。一方で、学校教育が目指す、学校と地域の連携・協働の在り方と、地域側の持つ「個別の課題解決に必要なマンパワーの間の擦り合わせ」には、より高度化された「地域協働の一体的仕組み」が不可欠だと考えられる。

そうした状況へのアプローチとして、高校生による「地域における新たな主体形成（地域活動のプロジェクト化）」が、課題改善の一つの方向性ではないかと考え、高校生自らが地域に入り、地域と協働して町づくりを行う「せんたんプロジェクト」を行ってきた。

今回は一年間の活動の成果をお互いに共有することで、今後、より良い活動を行っていくための、きっかけにすることをねらいとしている。

スケジュール

DAY1【各種成果発表】

海と日本プロジェクト「海の応援隊」

佐田岬半島の海の美しさを全国に伝えるプロジェクト

11R 山田 光毅　　12R 牧田 康太郎

CRI-HOUSE プロジェクト～高校生が創るコワーキングスペース～

「空き家×イノベーション」で新しいワーキングスタイルの形成

11R 市川 桃佳　島本 彩音

ちりめん

しらすを練りこんだ自家製麺を全国展開させるプロジェクト

21R 友澤 奈々美　　22R 宮地 風花

WWL（World Wide Learning）

将来，世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成するため，これまでのスーパーグローバルハイスクール事業の取組の実績等，グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し，高等学校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら，高等学校等と国内外の大学，企業，国際機関等が協働し，テーマを通じた高校生国際会議の開催等，高校生へ高度な学びを提供する仕組み（ＡＬネットワーク）の形成を目指す取組である。

本校は、京都の立命館宇治高校の連携校として、2019 年度より様々な活動を行っている。

＜ＷＷＬ事業＞

2020 年

第３回高校生ＳＲサミット「FOCUS」	22R 平野 汐華　中村 理歩
フィリピンオンラインスタディツアー	22R 内山 桜　梶原 凜　中村 理歩

2021 年

第４回高校生ＳＲサミット「FOCUS」	11R 野本 華帆　22R 平野 汐華
Online Global Program「FLAG」一期生	22R 農守 未佳
2021 模擬国連「MUN」	22R 梶原 凜　農守 未佳　宮地 風花　中村 理歩
Global Youth Fair～SURVIVE!～	11R 竹本 市忠　山田 光毅
フィリピンオンラインスタディツアー	11R 市川 桃佳　パライソ・アユミ・ニコル 12R 崎野 穂花

DAY2【三崎高校「せんたんプロジェクト」】

部門	班	コンセプト	活動内容（例）
イベント	カフェ	みさこうカフェを運営する。	みさこうカフェのトータルプロデュース、サービスの提供及び運営
	防災	防災意識を高めるための啓発活動を行う。	防災訓練の実施、防災意識啓発ゲームの作成
商品	商品開発	地域の特産品を生かした新商品を開発し、販売する。	地域の柑橘類や海産物を利用した新商品の開発、看板等の制作
	ツアー	ツアープランの作成やガイドマップの製作を通して、伊方町の魅力を発信する。	伊方町・佐田岬半島の魅力を伝えるための学校オリジナル観光ガイドマップの製作、旅行プランの作成
情報発信	アート	地域資源を生かしたアート作品を作成する。	防潮堤の壁画作成、未咲輝ロードの修復及び美化活動、映像作品の制作
	ＰＲ	メディアを活用し、地域や高校のＰＲ活動を行う。	三崎高校広報用フェイスブックの運用、地域ＰＲ動画の作成、みさこう体操 115 の普及
せんたん部	せんたん部	三崎おこし活動のトータルプロデュースを行い、各部門と連携して活動する。	せんたんミーティングの実施、みさこうマルシェの運営、各地域活性化フォーラムへの参加

令和３年度主な受賞歴

ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバル日本大会
アマチュアの部 ― 高校生のマーマレード ―

金賞、ベストカテゴリー賞	31R 古澤 美咲　増田 美咲
銅賞	31R 近藤 亜紀　野島 雅
	22R 内山 桜

愛媛高等学校家庭クラブ研究発表大会

優秀賞	三崎高校家庭クラブ

EGF キャンパスアワード 2021-2022

優秀賞（２位）	11R 市川 桃佳　島本 彩音
三浦工業賞（３位）	21R 友澤 奈々美
	22R 宮地 風花

八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ高校生部門

最優秀賞	11R 野本 華帆

第８回ディスカバー農村漁村の宝

特別賞「先端発信賞」（全国 651 団体の中から 34 団体）　三崎高校せんたんプロジェクト